

19. 都市祝祭

東京都市研究所が発行している「都市問題」で「祭とコミュニティ」という特集を読み、啓発された。コミュニティ政策学会も祭に関しては関心を示している。1970年代、日本が高度経済成長に入り、都市への人口集中が始まったころからコミュニティ政策が始まった。農村社会は人口減で共同体の力が弱まり、大都市ではあらたなコミュニティ構築の必要に迫られ、行政も意図的・政策的にコミットしてきた。

地元の伝統的祭の中で育った私は、コミュニティという横文字を使わなくても祭に関わることが共同体活動そのものであると信じてきた。また、祭と言っても神事がないようなのは祭ではなく、祭の在り方は万古不易、究極のマンネリズム、が持論だった。英語で言う所のイベントだとかフェスティバルの類は祭ではなく、祭はセレモニーのことを言うのであると言いつけてきた。

が、冒頭の「都市問題」により、東京など大都会の祭がどんどん変化し神社とは関係なく「都市祝祭」と呼ばれていることを知り、刺激を受けたので、名古屋の「にっぽんど真ん中祭り」のリーダー水野孝一さんと対談した。

全国の祭と言われているものの集客ランキング 1位青森ねぶた 2位博多山笠 3位弘前ねぶた 4位 YOSAKOI ソーラン 5位札幌雪まつり 6位博多どんたく 7位仙台七夕 8位「にっぽんど真ん中祭り」までがほぼ200万以上の人を集める。名古屋の「ど祭」は、たかだか始めて16年目であり、札幌の YOSAKOI ソーランを真似た、いわゆる鳴子踊りのコンテストだ。お盆に目抜き通りで繰り広げられるこの若者の祭典は参加者と見物人が一体化した熱狂の坩堝と化す名古屋の新しい風物詩となった。集金力も驚異的で公的補助はなし、民間で2億5000万円の資金を集める。

話はやや飛躍するが、最近の反原発のデモを一種の祭と解釈する人もいる。

そこでフランスの社会学者デュルケムの集団的沸騰の理論を思い出す。社会が社会として成り立つためにはその構成員が周期的に集合し、沸騰しなければならない。そのための仕組みこそが宗教であり、その為の仕掛けこそが祭であるというものだ。この場合、宗教的気分というのは聖なるものであり、邪悪なるものと対立する。祭に集う人の高揚感は聖なるものへの陶醉でありトランスである。中沢新一さんはこれを神の降臨という。

先日、構想日本の加藤秀樹さんご紹介にて、東日本大震災で失った祭の調査をした、福島県二本松の懸田弘訓さんにお会いした。お話を聞き、調査の報告書を読んで目頭が熱くなった。津波や原発で家を失い仮設住宅に暮らしていても、人々はまず神社と祭の再興に立ち上がった。神社と祭を失うことは故郷を失うことだという。祭を再興するというより、

祭によって生きる力を取り戻すのだと言える
のではないかと私は解釈した。